

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会  
第9回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事録

日時：2019年8月1日（木）14:00～16:00

場所：釧路地方合同庁舎 4階 第3会議室

【出席者（敬称略・順不同）】

< 専門家 >

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

< 学校教員 >

- ・釧路町立別保小学校 木村 浩二
- ・標茶町立標茶小学校 萬 拓馬
- ・鶴居村立下幌呂小学校 柴田 康吉

< 学校教育行政機関等 >

- ・標茶町教育委員会 指導室 指導室長 蠣崎 浩一
- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然再生企画官 中西 誠

< ワーキンググループ事務局 >

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然保護官 矢部 敦子
- ・公益財団法人北海道環境財団 山本 泰志、安田 智子

事務局 第9回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ（以下WG）を開催する。

（配布資料の確認後、事務局より出席委員を紹介）

以降の進行を高橋座長に願います。（以降、高橋座長により進行）

## 議事1 第8回ワーキンググループ会合以降の取組み

事務局 資料1に基づき説明。

高橋座長 前回の会合以降に実施した内容の報告であった。本日、関わられた先生も参加されているので、感想や子どもたちの様子など、お話をいただきたい。

萬委員 5月24日にフィールド学習を行い、環境省、北海道環境財団に対応いただいた。打合せの段階で、湿原と子どもたちとの出会いの場にしたいということを伝えた。説明ではなく子どもが自分で気付けるような、視点を持たせるような活動にしたいとお願いし、子どもたち自身が気付いたり、色に注目したり耳で感じたりといった場面を設定していただいた。湿原との初めての出会いで楽しみながらいろいろなことを発見することができた。現在、子どもたちが持った課題を追求している段階。課題のいくつかを紹介したい。まず、ヤチボウズが気になったという子どもたちが多かった。中身はどうなっているのか、何かの住処なのではないか、空洞なのではないか、根はどうなっているのかといった疑問が出ていた。木道が斜めになっている場所があり、そこに注目した子がいた。湿原がねちょねちょしているので斜めになった、沈んだのではと考え、その説を証明するために畑の横を掘って水を入れ、ぬかるみを作って割りばしで作った木道を設置して、斜めになるか実験したりしている。フィールドでは、多種多様な学習問題を提示していただけた。一方で、ヤチボウズ、きのこ、草花など、気になるものがどういうものか知りたい、調べたいとなると、インターネットや図鑑など、机の上だけで調べることになってしまい、そこからうまく進まない。体を使いながら新しい課題にぶつかっていく子は少なく、机の上で調べて知って終わってしまう。また、インターネットの情報が本当に正しいものなのか、子ども自身が整理していくことが難しい状態で、その辺の指導もしている最中である。

高橋座長 せっかく子どもたちが視点を得たあとに、もう一步進むために、うまい方向はないか。例えばヤチボウズならバッサリ切って中を見せてもらうとか、実際に子どもが手で触れてみるということは可能か。

萬委員 2学期に標茶高等学校のミニ湿原にもう一度見学に行けることになっている。少しでもあればフィールドのものを持ち帰ってもよいと伺っており、可能な範囲で借用できればと思う。

境委員 子どもたちが調べて満足したところで、先生がどう声かけするか。例えば、虫がいたことに満足させるのではなく、次に進めるような声かけをどのようにするかにかかっている。それにより新しい課題が見つかり、次のステップに上がっていく。これまでの自由研究は子どもから課題を出して、結論を導かせて終わり。あくまでも机の上で調べただけ。次の課題が生まれることで、本当の次のステップにつながる。互いに先生方で声をかけあいながら、次に行くときにどういった声かけがどうできるか、そこは先生の力量。また、5年生の段階でどれだけの力がついているか、学校全体で考えていく。例えば生活科の中で疑問を見つける部分を重視したり、3年生になったら疑問から調べる力をつけていく。一つの学年のある課題

に対して結論を導く、資質能力ベースに代わってきている。学年でどういった資質を身に付けていくのかということを持ち続けていけば、5年生になった時に見方が変わった研究ができる。学校全体でどうやっていくか、5年生の段階でどこまで力をつけていけるか。標茶小学校はある程度調べる力がついてきた。次のステップが楽しみ。5年生レベルでどの程度の力が身につくのか学校全体で議論してもらえたらと思う。課題を持ち、自分で仮説を立て、検証する力までついてきた。次は自分たちで課題を見つけてきて、その課題が見通しを持って調べる内容なのかということまで高めていけると良い。

高橋座長 小学校の高学年でこういうことをやっているが、その前から、3年生、4年生から積み上げて見る目を養っていけば、一貫性を持った学習ができるかと思う。

蠣崎委員 標茶小学校は町中の学校であるが、郊外学習を盛んに行っている。身近なところから探検する目を養う。それが1年生の生活科から積み重なり、3、4年生でも他教科でも観察をしたりして低学年の頃には気づかなかったことに3、4年生で気付いていく。最終的に5、6年生で全ての教科、領域の中で培ったものが生きてくる。標茶小学校は総合的な学習の時間も、私がいた25年頃にははっきりした形になっていなかったが、現在は整理されてきている。いろいろなつながりを意識して、資質能力ベースになってきている。6年間、どういった資質能力をつけていきたいか、学校プランがあり行っている。5年生の段階でヤチボウズやキノコ、昆虫などに興味を持ったことはスタートレベルで浅い課題。最初にある程度結論めいたものを子どもたちが材料として持って、次にヤチボウズがどうやってできるかといった、課題の連続性を生み出していければと感じた。結論を出して終わりではなく、それは通過点で、次の課題につながっていくための課題の連続性をどうもっていくかが先生方の腕のみせどころ。標茶町でもカヌー体験を施策で始めたところで、いろいろな角度から見目を養っているようにしている。標茶小学校はすごく頑張ってくれている。

高橋座長 標茶小学校はよい場所にあるということもあるが、北海道東部の湿原学習でいえば先進的に進んでいるだろう。いろんな視点から参考になる、応用するきっかけになるとよい。蠣崎委員、4ページのサイエンスフェアに関わってこられて、どうであったか。これについてご意見、ご感想をいただければ。

蠣崎委員 今年も来年も1回で終わりではもったいない。続けてもらえたらと思う。広く町民にお披露目できるのであれば、意義深いものがある。厳選された12枚のボードだが、標茶町としても開発センターとエコミュージアムセンター、標茶町博物館と3か所でとても良い展示をさせてもらった。とても皆さん協力的で、開発センターからは時期について問合せをいただいております、この時期に他の作品展などでフロアが埋まるので、場所確保のため早めに折衝して時期を固定できればよい。標茶小学校の学習発表会が11月になったので、年内に展示を行うのであればまた交渉しにいかねばならない。ぜひ続けてもらいたい。

高橋座長 こういうのは何年か継続して見ていったほうがよいと思うが。

事務局 続けていきたいと考えている。

蠣崎委員 できればA5版の紙でよいのでアンケートやノートなどを置き、自由に感想を書いてもらうスペースがあればと思う。またはパネルの横にホワイトボードを設置し、気付いたことを書いてもらい見た人の感想が聞けるとよい。開発センターの入り口で展示を行ったので、往來が沢山あり、施設に入って目につきやすかった。何か町民の声を聞けたらよい。ちょうど書道展の時期と重なったのでかなり往來があり、町内の他の学校の子どもたちも書道展を

見に行った時に通りかかって展示を見たという話も聞いている。

境委員 他の学校に広がる可能性はあるか。

蠣崎委員 展示を見て、虹別小学校がボートを使いたいとすぐ言ってきて、今年これから使う予定と聞いている。

高橋座長 ボードは希望があればどんどん提供する。やり方として新しい方向が見えてきた。

境委員 標茶町の取り組みの中で、各施設が各学校と連携していけるとよい。

事務局 標茶町博物館やエコミュージアムセンターのスタッフには、既に展示の相談をしており、概ね了承をいただいている。学校で行われる学習発表会についても出られるなら出たいと言っている。地域の施設との関わりを深めていけるように調整を進めている。

高橋座長 毎年行われている教員研修講座について意見を伺い、具体的な内容を検討したい。研修は10月頃にあと1回予定している。どのような研修内容がよいか、先生が業務として参加いただく平日開催がよいか、土日がよいか。参加される先生の率直なご意見も参考にして企画を立てたい。

木村委員 個人の意見だが、土日はこの時期には大会やクラブなどもあるので、参加される先生も限られる。平日であれば、学校で郊外研修の制度があり参加することは可能。夏休みの初めは、夏季講習など補修的な授業を行う学校が増えており、午前中に行われていることが多いので、午後からの方が参加しやすい。

高橋座長 平日、午後からのほうがよいかもしいない。

柴田委員 自分のような人は土日の方が有難いが、普通の先生方は研修としての活動としてあてられるので、長期休み中の方が参加しやすい。また、学校の規模による。小さい学校だと一人抜けると痛手で、参加しなければならぬ研修も多くある。学校の規模にゆとりがある、市内の比較的大きい学校の先生であればいろいろと参加しやすい。時期は夏休みであれば8月に入る今日くらいまでの間が妥当。お盆になると2学期が始まる準備もある。土日よりも平日の方が動きやすいかと思う。

高橋座長 土日は難しそうか。平日で、場合によっては午後からということも考えられるか。

柴田委員 午前中は少年団などの活動もあるので、行うなら午後ということも考えられるだろう。

高橋座長 内容に関してはどうか。

萬委員 昨年度まで鳥取小学校にいた。3年程前に研修に参加した。以前の研修では崖のような場所で地層を見たり、湿地帯に入ったりした。1学期の終わりの平日に朝から夕まで1日行ったが、市内の学校にいたのでそういった参加ができた。現在、湿原の学習を行っているので、直接的に関連する研修であれば参加する価値があると感じる。社会や理科であればねらいが決まっているので、そこに合わせていただけると出やすい。

高橋座長 年に何回か実施するとすれば、回ごとに特徴を持たせることも出来る。朝から晩までのプログラムだと大変か。

事務局 富田委員、釧路市教育委員会から事前にいただいた意見を紹介。

高橋座長 以前、企画時の調査不足で人が集まらなかったことがあった。様々なご意見に感謝申し上げます。

## 議事 2 第 3 期再生普及行動計画期間における取組みの評価

高橋座長 5 年毎に活動を振り返り、進め方について新しい取組みが可能かどうか決めていく。今年がちょうど 5 年目にあたり、これまでの 5 年間で振り返りたい。

事務局 資料 2 に基づき説明

高橋座長 資料 1 の報告と重複する部分もあるが、これまでの取組みの経過報告があった。これに基づいて意見をいただきたい。説明にあったように、釧路湿原自然再生普及行動計画（以降、行動計画）というものが具体的な取組みを行っていく指針になる。その中でこの WG の取組みも位置付けられている。学校教育ということで限定すれば、行動計画の中で「3-2 湿原に関する環境教育の推進」の項目中の「(3) 学校における湿原活用の支援」が該当する。新たにこれから 5 年間の行動計画を作るにあたって、先ほどの報告に基づいて整理しながら意見を伺いたい。まずは、学習サポートとしてどのような事をすべきか、どういったことを加えれば能率がよくなるのか考えてみたい。学習サポートについては第 3 期の行動計画から力を入れて行ってきた活動になる。

境委員 教える、教えられるの関係ではなく、一緒になって学ぶ、スタートを切る、そういったサポートはとても有難い。

高橋座長 一歩進んだ先生と生徒との関係、あるいはそこからの学習ということだが、どのように生かしていけばよいか、順に意見を伺いたい。

木村委員 学級担任を離れて何年か経つが、理科を専門にやってきて、それなりのフィールドの経験は積んできた。個人的にもイベントに参加したり、子どもを連れて自然探索したりということをしている。先生によって得手不得手がある。こんなところが地元にあったんだと気付くきっかけや、本当に知らない先生にとってはもっと支えが必要。今回、地域コーディネーターの方が事務局と繋いでくださり、その流れから発表ボードを使った取組みを行うことになった。事務局との打ち合わせの中で、こんな近くに学習に使えるフィールドがあるということを知った。情報は先生方にあまり伝わっていないと感じており、もう少し積極的なアプローチが必要。自分が職場の中でアプローチできる立場になっていければよいと思っている。我々みたいな有志を増やすことも必要であろうし、センター講座のタイアップでアピールしていくことも必要。様々な分野にいる方の力も借りながらでないと、なかなか広まっていけないのではないかな。

高橋座長 もう少し周りの人たちとの連携が必要ということか。

柴田委員 WG 立ち上げ時の頃を思い出していた。事務局から「学校と地域を繋ぐ役割を担うが、事務局がメインで行っていくのではない」としきりに説明された記憶がある。先生方の力でたどり着くことを最終目標としているのであれば道半ばという印象を持つ。確実に先生方に広まってきている印象はある。担任になり、湿原を交えた授業を行うことになった先生には引っかかる。自身も今年は福祉がテーマなため、今は福祉の話には引っかかる。そういう意味では、授業に関わることを採用していかないといけないため、単純に「湿原の情報が来たから伝わった」ではなく、あるけど使わない、知っているが行かないといったことも多くある。現在の取組みとしては目に見えない部分でも認知は広がってきているのという印象を持っているが、仮に先生方だけで専門家とやり取りしていくことを目標にするのであれば、

もう少し工夫が必要だろう。現実として先生方は専門家のレベルにはなれないので、今後も間に入ってもらえたらと思う。

萬委員 小学校に赴任し5年生では総合的な学習の時間で釧路湿原の学習を行うということで、今回たまたま引っかけ、釧路湿原のことを勉強していくといろいろな方とつながってすごく楽しいと感じている。子どもにガイドを行うような感覚で、事務局のスタッフの方と事前下見を一緒にやっていただいて、それがとても楽しい体験だった。その経験をもって、それだったら子どもたちにこうやらせたいとか、ここに注目させたいといったイメージを持って実際の活動に入れたので、そういうきっかけは湿原を知らない若手の先生には必要。初任者研修として釧路湿原に行くなどは難しいであろうか。特に道東で働く先生にとっては、釧路湿原は切っても切れない関係だと思う。初任者研修で行うことが出来れば引かかる先生は多いのではないかと感じた。

高橋座長 可能であろうか。

蠣崎委員 初任者研修は法律で定められた研修なので、内容自体は実施機関である教育局で決められる。釧路教育局が担当であれば釧路湿原を使ってみましょうという発想があってもよいと思うが、釧路と根室と十勝の3局が合同で行っており、担当が持ち回りになる。必ずしも毎年釧路教育局が主催で行うわけではないので、根室がやると北方領土の学習にシフトしたり十勝がやるとダイナミックな十勝平野であったり、様々なテーマになってしまうので地域素材を入れ込みにくいのが実情。研修に位置付けるのもよいが、現在、働き方改革との背中合わせの問題で、いかに負担をかけずに行うかという点もある。そのため、引がかかった人が湿原に行くようになってしまうのはそのせいだと思う。また、校長の立場からすれば、こればかりではないということもあり、なかなか背中を押しきれないという状況もあるだろう。入れ込んであげたいが、費用弁償の問題なども出てくる。知らない人が知るという事がきっかけとしては一番大きいであろう。

高橋座長 引がかかってみて、そういった世界に触れ、人のつながりを経験してみて視点を広げたという感覚があると思うが、偶然という事が多いのであろうか。

蠣崎委員 恐らく、皆さんひよんなことから引かかっている。私は最初市内の学校がスタートであるが、平成6年頃に湿原が火事になったのが大きなきっかけとなった。湿原は水だらけなのに燃えるんだ、あんなに広がって湿原が黒くなってしまうのかと大変驚いた。その後何年かして鶴居に行った時に、みなくるに行き展示されている湿原のモデルなどを見て、改めて自分のクラスを湿原に連れて行ったり、温根内のホテルウィークに行ってみたりといったことを行った。そうやって本当にひよんなことから引かかるのであろう。

高橋座長 そうすると様々な機会に、絶えず出し続ける必要があるということであろう。その度に一人ずつ引かかってくれる先生が出るのかもしれない。資料中のグラフで、湿原での対応が増えているが、湿原学習の課題として最もよく話に出てくるのが、湿原に連れて行きたいが交通機関の問題や時間が取れない、費用が出ないといったことがあったと思う。無理に湿原に行かなくとも、学校近郊で湿原についての学習ができないのかという話もよく出てくるが、事務局として、先生たちと話をしたりアピールに出歩いていてどのような印象を持っているか。

事務局 基本的には移動手段の確保が大きな課題ということはどこに行っても聞く。町営のバ

スを使える鶴居村や標茶町では、早い段階で計画さえ立てば湿原に一度訪問することは可能ということと言われるが、その他の自治体では基本的には湿原に行きたくとも行けない。現在、期間を設定して事務局との連携事業としてバス代を負担し、湿原を題材としてどのような学習ができるか試していくということを行っている。湿原を使ってどういった学習ができるか試してみたいという学校はあるが、事務局と連携しなければ学校としては試せないという状況にもある。

高橋座長 5年間でその問題は解決できないままで来てしまった印象があるが。

事務局 その事実は変わっていないと思うが、実際にビジターセンター等に来る学校は確実に増えている。ということは、そうした状況下で湿原に目を向けようという学校は確実に増えていると捉えている。

高橋座長 大学の中で学生をフィールドに連れて行くという授業をいろいろな形で行っていたが、無茶なことをやっていた。あの頃はスクールバスさえなかったため、2~3人の先生個人の車に学生を乗せて行ったりしていた。そのように移動手段がなかったが、やっとそれが改善されてきた。

境委員 学生の頃は車で赤沼に行った。今までは学校の先生方に考えてもらって授業で湿原を活用してもらおうとしてきた。だが、先生の卵、つまり学生に対しても湿原に目を向かせる方策を考えなければならない。実は前田一步園から阿寒の森を活用してくださいと言われていて、5~6年程前に教員研修を行ったが上手くいかなかった。理由として、先生方が時間が取れないということだった。現在、方向転換したのは、学生たちを阿寒の森に連れて行って様々な活動をする中で、将来教員になった時にこんな活動をしてみたいと思わせるようなプログラムを作っていきたい。来年すぐできるかという無理だが、その先生方が30歳くらいになり自分たちの学校で宿泊研修に行くとなった時に、阿寒に寄って行こう、そういったプログラムを立てられるのではないかと。湿原でカヌー体験をしようということではなく、教育プログラムとしてどういうことをやろうかということを考えても良いかも知れない。将来的にどういう風に使ったら良いか学生に考えさせるのも良いかもしれない。

高橋座長 全ての学生が大好きで是非というわけでもなく、最初に連れて行った時に虫が飛んできてパニックになる事から始まるわけだから、学生が、北海道の道東の学校の教員になるのであれば、そういった経験なり能力を育てていくべきであろうと当然考えるが、そのための具体的なノウハウはなく、何人かの先生の個人的努力によって行われている状況である。いろいろと話を伺っていると学校教育の中でも理解のある先生の個人的な努力に頼っている面もある気がする。

蠣崎委員 引っかかって吊り上げられて面白いと気付く人が大半だと思う。初めから湿原をこの町の学習に入れ込みたいと思う人は限りなく少ないのではないかと。子どもたちにしても、担任の先生が釧路湿原を題材にして勉強するというきっかけを与えてくれないと、わからないことが多いだろう。子どもは興味を持てば、エネルギーを我々以上に持っており、我々の期待を飛び越えて気づいてくれることが沢山出てきたりするので、すごいなといつも感心する。きっかけの与え方、タイミングと学年。標茶小学校は5年生が行っているが、それでよいのか、もっと下の学年がよいのか。中学校3年間での学習が抜けることがもったいない。標茶高校という大きな総合学校がある街であるのに、そこが抜けるもったいなさがある。そ

のつなぎ方が難しい。

高橋座長 釧路市内でも同じように中学校での学習が少し抜けている。中学校の先生に伺うと、実はとても難しいと。入れ込むだけのゆとりがない。その辺りを工夫する必要があるだろう。

蠣崎委員 問題点は、総合的な学習の時間の捉え方や考え方が小学校と中学校では違うこと。9年間のカリキュラムマネジメントの発想でつながっていかないのはそういうところであろう。受験制度が変わっていかないことには、いろいろなものが変わっていかないのではないだろうか。

高橋座長 現在のような受験ということになると、9年間を通しての学習が難しいのであろうか。

蠣崎委員 どうしても資質能力ベースに行ききらないで終わってしまう。まだそういう風潮がある。これからどんどん変わっていくと思う。

事務局 畠山委員から事前にいただいた意見を紹介。

高橋座長 それぞれの立場から意見を伺うと、一筋縄ではいかないことがわかる。その中でも一歩前進したい。学習サポートから先生方の教員研修のあり方に話に移っているが、研修をもっとやればよいという意見もある。他の組織と連携し協力し合って行うという形で進んできたが、いろいろと工夫をして、参加人数を増やす、中身を豊かにするということを考えようとしている。

事務局 畠山委員から事前にいただいた意見を紹介。

高橋座長 次の5年間に向けてアイデアを組み込むように考えていきたい。発表の場づくりの仕組みとしての支援の形について、これまでの発表と違う点をはっきりさせ、それをもとに話を広げたい。

境委員 様々な学習の場を設定されていて欠けていると思うのが発表のまとめ方。その指導がきちんとされていない。2つ目はIT指導。パワーポイント等が導入されてきて、アニメーションなど、そういうところに目が行くが、きちんとまとめているかというところでもない。学生でも同じ状況で、何となくまとまっているようで少し違う。課題とまとめがずれている。プロセスがなっていない。そういう時にこのボードを使わせることで良いと思うのは、1枚の中でまとめ方の指導ができること。課題があり、仮説を立てて、どういった実験の方法をまとめるのか、最終的にどのようにまとめて考察するのか。これらを1枚の中で指導することができる。1枚の中で自分の研究が見える。標茶小学校では、ボードからそれぞれの項目をまとめた用紙を剥がすことができる方法を編み出している。仮説を立てて進めていくうちに仮説がおかしいと感じれば、仮説に戻って貼り替えていく。その中で自分の発表する課題とまとめが一致するようになっていき、良いなと感じる。研究はまとめの部分をきちんとさせたい。研究を1枚に見えるようにさせたい。ITに頼るのではなく手作りの良さがあるのではないだろうか。

高橋座長 発表を聞く人から時に厳しい批評があったり、そういった仕組みも組み込まれているが。

境委員 発表させることによって様々なところから意見をもらう、評価してもらうことが大切。評価してもらう視点もあげたほうが良いと思い、評価項目を作った。先生方もその評価を見るようになった。指導をする中でどうやったらよいか、項目を挙げることによって研究を先

生方と子どもたちが一緒にできるようになってきた。

高橋座長 これまでと違う発表の形式というだけでなく、ボードを使うことによって生徒たちの発想に変化が起こったり、発表を見る人たちにも影響を与えるということが期待できる。

今後もさらにこの仕組みを支援していくことを考えている。

木村委員 マスキングテープで貼り替えられることがとても良いと感じた。修正ができる、個人であのサイズのボードを使えるということも大きい。

萬委員 枠があることによって自分一人でやりきる。研究を進めていくことが出来る子が多くなる。私自身、大学に行って初めて研究の順番や見通しを立てて考えていくことに触れた。それを小学生の時からできるのが良い。私も小学生の時から知っていれば楽しかっただろうなど感じる。皆が研究者になれるような気がする。

高橋座長 可能性を迫及した形で広げていきたいと思う。5年間を通じた構想を作るための資料として参考にさせていただく。全体を通して意見があれば。

木村委員 今回、別保小学校で行うフィールド学習については、環境省に間に入ってもらっているが、何年かフィールド学習を行った後、自分たちでフィールドを探すとなった際、手続き等が課題になると感じている。なかなか事前に調査に行くことはできない。自分達でやるとなったときに、必要な申請の手続きや道具など、専門家の方に補ってもらえるとありがたい。

高橋座長 そういった依頼があったときに対応するのは可能か。

事務局 数年間連携させていただいた後に、支援を全く行わないということではない。許可関係などは問い合わせいただければできることは対応したい。

蠣崎委員 資質能力の話に戻るが、学びに向かう力や人間性の涵養の部分。何を学んでどういう自分になっていったのか。自分の息子がボードを活用した学習を5年生でやらせてもらった。取組みの初年度だったので疑問を持ってみていたが、子どもたちの主体的、深い学びを形に整理したものがこれだと思う。考察が最後の学習の振り返りになる。参考資料にあるボードの3ページ目のパネルでは、あえて振り返りと書いている。これがすごく気になった。学習の振り返りをしましよとしてしている。この子は普段の学習の延長と捉えてきちんと振り返りをしている。そのため、最後の文面が「次はこういうことを調べてみたいです」と書かれている。次にどうつなげたいか意思表示をしている。振り返りが入ってくると課題の連続性が出てくる。別の子のパネルでは、これでおしまいになっている。ボードの使い方も普段の勉強と同じで、この学習を振り返り、さらに次のボードに生きてくると、課題が連続していく。それは去年の中間発表を見ても感じたことであった。

高橋座長 北海道の地域でやっていく中で少しずつ変質していき、ふさわしい形ができていくということであろう。

境委員 今年に入って学生にやらせてみたが、結論を出したがる。出ないと落ち込む。それは研究ではない。結論が出なかった場合どうあるべきなのか。学生の一人が、ツルが出ないままで朝顔の花を咲かせる実験を行ったが、発表までの期間が1か月程しかなく、芽がやっと出たくらいであった。そこまででよいからとまとめさせた。最後に、どうすべきだったのか、もう一度考察すれば次どうしたいかが出てくる。それでいい。結論を出すことを先生が求めては駄目で、やっている過程をまとめなさい、そういう方向にもっていきと次につながるも

のできる。

蠣崎委員 実際はボード1枚分しか書かなくても、子どもたちの中で目に見えないボードが2枚3枚とつながっていくのが総合的な学習の時間の本来のねらいだったので、そこは上手くつながると良いと感じる。

高橋座長 新たに課題が生まれる形で良い。見守る先生も成熟が必要になってくるように思う。

境委員 教えなければいけないとなると、湿原をテーマにした学習は絶対に無理だと思う。一緒に考えていこうというスタンスでよい。

高橋座長 他に意見がなければ本日はここまでとしたい。以上で本日の議事を終了する。事務局にお返しする。

事務局 次回のWGは年明けの冬休み中の実施を予定している。委員を個別に訪問し、意見を伺いながらこの取り組みを続けていきたい。これで第9回学校支援ワーキンググループを閉会する。